

政治諷刺と国家権力

宮 井 敏

Oxford版 New English Dictionary によれば“satire”とは、「今行なわれている悪徳や愚行に対してあざけりをあびせる詩、乃至は近年では散文。時に特定の個人乃至は階級に向けられるその種の詩、又は散文。」とある。一方、Webster では、「公的、私的な形をとるゆき過ぎ、あやまり、悪徳、愚行に対する非難、あざけりを目的とする文学作品。もとは詩を主体としたもの」であると云う。いづれにせよ、悪徳、愚行をあざける「文学作品」であることでは両者共通しているが、実際には、satirical dramaのように、又、caricatureのように、文学の枠を越えてあらゆるメディアに見られる、嘲笑による攻撃を芸術化した一つの表現形式である事は間違いないところであろう。

「諷刺」のほうは中国語、日本語とも「とほまわしにいう、あらわに云わず、他事によそへていさめる」の意であり、はじめから広い範囲を包括するものと云えるが、ただ違っているのは、「諷刺」に対する類語が殆どないのに対して、“satire”の場合には、“lampoon,” “wit,” “invective,” “cynicism,” “the sardonic,” など、それぞれ枚挙にいとまのない程ある事である。H. M. Fowlerはその辞書²のなかで、動機、領域、手段、聞き手にわけて、これらの言葉の定義を試みているが、それは一つの解釈であ

1 他に sarcasm, innuendo, irony, parody など。

2 H. M. Fowler, *A Dictionary of Modern English Usage*, Oxford, 1926, p. 241, “humour” の項。

って、実際問題としてはこうした類語が時に重なり合い、個人差があり、誤用されて、かなり混乱していると云うのが実情であろう。この事は英語圏において、“satire”という語が時代により、人により、それぞれニュアンスを異にしながらも、きわめて活潑に用いられて来た事の一つの証左であろうとおもわれるが、同時に“satire”に超自然な力を想定した原始の時代はさておき、長く複雑なイギリスの歴史の中に、“satire”という菌が発酵する為の恰好の条件が何度かあったという事実が、その synonyms の多様さとなって表われたものといえよう。

ところで、冒頭にのべたように諷刺の対象は一般的には悪徳、愚行、行き過ぎ、誤りだとされるが、より具体的には、政治、風俗、文化をはじめとして、戦争、宗教（とりわけ国家権力と結びついた教会体制）から女性そのものに到るまで、ありとあらゆる社会事象が考えられるが、当然の事ながら、とり上げる対象によって用いられる手段もまた異なって来る。鋭い政治諷刺にウィットやユーモアはお門違いであろうし、洗練された風俗諷刺に寸鉄人をさす攻撃は逆効果でしかない。さきの Fowler に欠落しているのはこの視点であって、政治権力との緊張関係を不可避とする政治諷刺と、ウィットに富む揶揄を最上とする風俗諷刺を両極として、その間に並列する対象領域と執られるべき手段との有機的関連においてこそ“satire”の英語は分類さるべきものであろう。

とは云うものの、あまた数ある文芸学上の議論の中でも、「諷刺」の定義ほど厄介なものはなく、さまざまな角度からの種々の試みにもかかわらず、今なお満足すべきものを持ち得ていないのが現状である。もともと諷刺が伝統的な正統のジャンルを形成していない事と、複雑多岐にわたる副次的形式をかかえ込んでいるためであろうが、ここではかつて論じた如く、時代と社会、形式をこえて諷刺文学をユウェナリウス型とホラティウス型に大きく分類すると云う区分³に従って、主としてその前者を執り上げてゆ

くことにしたい。

古羅馬の詩人ユウェナリウスは「怒りは詩を造る」(Indignato facit versus.)と唱えてストア的人生観を基調としてペシミスティックな怒りを詩に謳った人で、その諷刺は力強く、直接的で、攻撃性にとみ、極めて効果的であったといわれている。一方、ホラティウスはエピクロスの世界観を背景にして、すぐれた技巧を駆使して人情の表裏をうたい上げた詩人であり、その作るところは内省的で、ユーモアに富み、徒らに絶叫することなく、都会的な *sophistication* を専らとした人であったという。当然の事ながら前者は政治諷刺を、後者は風俗諷刺を本領としたわけであり、対照的なこの二大類型に従ってイギリスの文学史を通覧すると、一方では Juvenal-The First Butler, Dryen-Swift-Orwell という系譜が、他方では Horace-Ben Johnson-Pope-Waugh という系列がみとめられる、と論じたのである。

もともと政治には他のいかなる社会現象よりも、悪徳、愚行、ゆき過ぎ、誤りが数多く見られ、文学者の眼から見れば政治はこれら四つのものからのみ成立しているともいえるわけであり、政治が諷刺の最大の的となることは必然の結果であろう。また一方では、諷刺はそれが何等かの形において社会に影響を及ぼそうとするかぎりきわめて政治的なものである。従って諷刺文学はまさに政治と文学の接点に位置して政治文学の最左翼を占める形となるのである。

この接点は一方に政治が、他方に文学が存在する限り、いつの時代にも、又どのような社会にもあり得たわけであるが、そこから常に最大限のスパークが見られるかどうかはまさに条件如何によるものであり、時間的空間的要因の複雑なからみ合いが文学史上政治諷刺の傑作を生んで来たも

のといえよう。M. ホジャートは「諷刺の敵は専制主義と地方感情である」と云う⁴。あまりの独裁体制では一切の言論の自由が封じられる結果、権力者にさからうすべての表現は完全に抑圧されて存在を許されなくなるし、又、或程度の政治のメカニズムに通じていて、かつ旺盛な批判精神をもつ大衆の存在が政治諷刺の聴衆として不可欠であるが、それは主として都市部にのみ見られるものだからであろう。

ホジャートは諷刺成立の欠格条件として二つのマイナス要因をこのように指摘するが、では逆に専制主義のない、完き民主主義体制と、高度に洗練された都市性が積極的な成立条件となりうるかと云えば、それが必ずしもそうではなく、むしろ完全なる言論の自由も又すぐれた諷刺を生み出す条件とはならない。政治諷刺は常に政治権力との一定の緊張関係を不可欠とするものであり、完き言論の自由と完璧なる言論の圧殺のいずれでもない、いわば専制政治崩壊の寸前に現われるのを常とするのである。元来諷刺は非力を前提とする自己主張の一形式であるから、体制が今倒されようとする動乱の真最中にはただ沈黙を守るのみであり、又、いわば斜に構えたポーズからの発言は倒壊後の新体制建設中には無用のものでしかない。結局それは既成の価値観の転換期に、革命の前夜に最も活躍することになるのである。

このような政治諷刺にとっての好適の条件というものは、当然の事ながらいつの時代、社会にも常に見られるというものでは決してなく、世界の歴史においても、かなり数少ない状況に限定されて来る。政治は本来刻々に変化する社会情勢に対応するものであるから、それを対象とする政治諷刺もおおのずとその時々々の政治のトピックスを satirize せざるを得ない。つまり政治諷刺の時事性、topicality⁵ という側面がきわめて重要な意味を

4 M. ホジャート、山田恒人訳『諷刺の芸術』世界大学選書、p. 55.

5 英和辞典では昭和五十年以降収録された言葉。

帯びて来る反面、その時事性は時と場所を超えてはその時々の特異性が伝わりにくいという欠陥をはらんでいる。結局政治諷刺は新聞記事の見出しであって、超時空の普遍性を持ち得ない代物ということになるのである。

ところが、政治上の大きな矛盾と質の高い政治諷刺の出会いというのは歴史上それが稀であるだけに、逆に一定の代表性を獲得することになり、時代と社会を異にする人々の間に永く記憶されることになる。つまりすぐれた政治諷刺の続出する時代とは、いわば政治と文学の幸せな出会いの時という事になるが、ふつうヨーロッパの文学史ではそれは三度あったとされている。すなわち紀元前五世紀のアテナイの黄金時代とアリストパネスの作品群であり、十七世紀イギリスの政党時代とジョナサン・スウィフトの諷刺文学であり、十八世紀初頭のフランス啓蒙期のヴォルテールの投獄、追放と諷刺の重なり合い、ということになっている。そしてこうした事例に共通していることは、いずれも検閲制度はあったがさのみ強力なものではなく、弾圧は行なわれたが肉体的抹殺をもたらず程ではなく、時代の背景としては Great Age と呼ばれてよい程の一つの epoch がようやく爛熟し始めた頃であり、又これら大諷刺家はそれぞれ平均して高い政治意識をもつ首都の都会人を聴衆にもっていたことなどである。各時代の政治の状況もその時々の特異性をこえて、人間の歴史一般の上で大きな意義をもつものであったところから、通常のマイナーな政治諷刺ならば当然忘れ去られ、失なわれてしまう筈のそれぞれの時代固有の言外の意味やあてこすりの的が綿密な註釈の中に再現されて、政治諷刺の古典として今我々の手許に残っているのである。

現代社会においても、一方の側に政治があり、他方の側に人間の批判精神が存在するかぎり、政治諷刺は常に活躍の場を得て来たが、それがどの程度に成功を収めるかはまさにその時々状況と存在した才能による。お

しなべて社会主義政権や独裁政権下の社会では、言論の統制がきびしいために、時の権力の直接の批判がすべて日の目を見ないのは当然であるが、これを間接に批判しようとする諷刺の場合すら、文字を以てするものはその指摘が細部にわたり、より具体的であるために殆ど発表を許されないのが常である。カストロ政権下のキューバの場合のように、すべての芸術に対して権力の干渉は絶無といってよく、社会主義リアリズムを強要される事さえないのに対して、エルベルト・パディリヤの「キューバ詩集」(1967年)の例が示すように、文学関係のみに対して検閲、弾圧がきびしいという事実がその間の消息を物語っていよう。

これに代って活躍するのは新聞紙上の政治漫画、と云うよりは諷刺画であって、インドネシアの各紙に見るように、発禁処分と解除の間をぬってさまざまな工夫をこらしたものが紙面を飾ることになる。最大の発行部数をもつカトリック系日刊紙コンパスの場合⁶など、解禁当日ふだんは四面に載せられる政治漫画欄を第一面にまわし、全面白紙のスペースの片隅でいつもの主人公にただ一こと「お早よう」と云わせて無言の抵抗を示し、同時に当局の言論取締まりをみごとに諷刺して成功を収めている。「これなら文句あるまい」と云うわけである。またプロテスタント系夕刊紙シナル・ハラパン⁷のように解禁の日に大きな白紙の写真広告をのせ、コーヒー・カップの横にシナル・ハラパン一部がおかれてあり、その紙面のトップに「大統領は独裁者ではない」という見出しがのぞいている、という甚だ手の込んだテクニックで検閲官をからかいながら検閲制度そのものの諷刺を目論んでいるのもその一例であろう。

タイの場合は新聞ではなく、「答えのない大学」という題名の諷刺雑誌が発端であった。タンヤイ動物保護区で政府高官、財界人、映画女優等著

6 1978年2月6日付。次註共1978年2月18日朝日新聞外電。

7 1978年2月6日から一週間連載の広告。

名人の大きかりな密猟事件が起り、当局のもみ消しに憤激した国民の声をうけて、バンコク郊外フォアマークのラムカムハン大学の学生が、「タンヤイ議会は動物達の任期延長を可決した」と、まさにジョージ・オーウェルの「動物農場」ばりの諷刺漫画で攻撃したのである（1973年6月）。学生たちはタンヤイ動物保護区をタイ政府の閣議に、閣僚を動物たちに、「任期延長」を当時のタノム首相、プラパート副首相の一方的な任期延長に引掛けたのであるが、この反政府発言に怒ったサック学長が関係学生九名を退学処分にしたところ、⁸それまで比較的政治行動の少なかったタイの大学生を刺激し、バンコク市内七大学四万人の学生デモとなり、遂に日本商品不買運動にまでひろがったといわれている。政治諷刺が潜在していた大衆の政治意識に火をつけて先導した実例といえる。

これが長期にわたって安定している社会主義政権となると、言論統制も長年にわたって板に付いているために、諷刺そのものが体制の中に組み込まれている場合が多い。ソ連の諷刺漫画誌「クロコジール」は1922年の創刊以来半世紀、ただの一度も発禁処分になることなく1972年50周年をむかえた。有力寄稿家のボリス・エフィーモフは特別記念号の序文のなかで、「わには長生きだ。われわれの“わに”も例外ではあるまい。うむことなく諷刺の任務を果させよう！いままで通り、目ざとく、爪を研いで、攻撃は正確に、鋭い歯で！」⁹とうたったが、何しろ発行は党中央委直轄のプラウダ出版局のこと、研いた爪や鋭い歯が当局に向けられる筈もなく、外電の報ずる数ページで見ると、諷刺どころか単なる社会戯評に終わっているのである。エフィーモフはまたアジトプラカート（宣伝用政治漫画）の名手といわれ、その作品はしばしば目抜き通りのビルの一階のウィンドウを飾っているが、¹⁰革命後の1919年国内戦のさなかにキエフの赤衛軍

8 1973年6月29日朝日新聞、外電。

9 「社会戯評ソ連版」1972年10月18日朝日新聞夕刊。

10 「世界の顔」1973年2月20日朝日新聞夕刊。

の機関誌に登場以来、時に海外の「ソ連人民の敵」を攻撃することはあっても、国内の政権を狙上りにのせることは皆無であり、その漫画は一貫して世相一般をやんわりと皮肉って来たわけである。

1977年5月、ブルガリアの首都ソフィア近くのカプロボで開かれた第三回「世界のユーモアと諷刺フェスティバル」についても同じことが云える。「世界は笑いでみつ」というテーマをかかげて80ヶ国から5251点の応募作品を集めたこのビエンナーレも、第三部門の「諷刺画・漫画」部門に限ってみても、51ヶ国 987人の寄せた1963点のうち、政治諷刺の名に値するものは皆無であったといわれている¹¹。日本からの18人21点も含めてそのテーマは地球全体をおおむね危機感を示すものや人口問題や資源問題はあっても政治をテーマとするものは皆目見られなかったようである。例によって例の如く、責任者である「世界のユーモアと諷刺」会館の館長スアファン・ファルトノフ氏の「出品内容を規制したり、政治体制批判を拒否することはありません。社会主義陣営に対する批判も自由です。ただそういうものが出品されなかっただけです」という発言はあっても、現在では政治漫画の本場とも云えるアメリカから二名三点の出品しかなかったという事実が何よりも雄弁にその間の事情を物語っているといえよう。

政権が長期にわたって安定していなくても、有力な反政府勢力の存在しないところでは政治諷刺はさきの状況と同じように根本的な体制批判を抜きにした単なる社会戯評に終わってしまう事が多い。1978年9月2日、ベトナムは建国三十三年を向えたが、社会主義共和国を宣言してからではまだ二年二ヶ月にしかならず、いかにして社会主義建設を進めるかという大テーマの下では、諷刺すべき対象は身辺雑記のようなものに限られてしまうのである。人民軍機関誌「クワンドイ・ニャンゼン」、文化情報省発行の「文化芸術」誌、ベトナム共産党機関、「ニャンゼン」などの紙面を飾る

11 「東欧共産圏の美術と政治」『朝日ジャーナル』、1977年7月1日号。

漫画は、「ハイ、クワッ！」(愉快だねえ)、「オオイ、ゾヨ、オイ」(おや、まあ)と読者の微苦笑をさそうことはあっても、寸鉄人を刺す程の鋭い政治諷刺というには程遠いものがあるようである。

良質の政治諷刺は国家権力との一定の緊張関係と、すぐれた文学的才能のせめぎ合いの中から生まれるものだとすれば、朴政権下の韓国の状況と、幽囚の天才詩人金芝河の場合はまさにそれだったといえる。発端は1970年5月だった。1961年軍事クーデターによって政権の座についた朴正熙は1966年日韓条約の強行批准を経て急速に独裁の性格を強め、同時に体制内部の腐敗、汚職は国民大衆の眼にも明らかとなっていた。韓国第一の総合雑誌「思想界」は五月号に金芝河の長篇諷刺詩「五賊」を掲載、直ちに発行禁止となったが、野党第一党の新民党が機関紙「民主前線」(六月一日付)に全文を転載、全国に配布しようとした寸前、政府は新民党本部をおそい三十万部を没収、同時に作者、編集者を逮捕した。開催中の韓国議会はこの言論弾圧をめぐって大荒れとなり、与野党四十数名がなぐり合うという乱闘国会は空転をつづけたのち、六月九日休会するという空前の騒ぎに発展した。この直後「週刊朝日」はひそかに原文を入手し、在日韓国人文学者数名の協力を得て藤島宇内が邦訳、6月26日号にその全文を紹介した。

「五賊」というのは1905年の第二次日韓条約に際して署名した李朝の五人の大臣乙巳五賊のことで、朝鮮民族のなかではふつう売国奴の代名詞となっている。作者はこの歴史的事実をふまえて、財閥、国会議員、高級公務員、将官、大臣・次官を現在の五賊としてその汚職、腐敗、職権濫用を徹底的に諷刺しようとしたものである。原文は朝鮮文学の伝統的な手法である唱劇、パンソリ形式をふまえて、卑語、擬態語、隠語、方言、地口、

12 「マンガで見るベトナム」1978年9月4日朝日新聞。

文語体の故事などを縦横に駆使した格調の高いもので、朗読に耐える劇的構成をもち、大衆にも充分理解出来る見事なもので、従来の朝鮮詩にみられないユニークなものだ¹³とされている。

さらにこの年、金芝河は国土分断の悲しみと、政情へのいきどおり、統一への悲願をドラマに託して、戯曲「銅の李舜臣」と「ナポレオン・コニャック」を書き下したが、中央公論が1971年7月号で全文を翻訳紹介した前者の場合とはりわけ多大の反響を呼んだものであった。つづく1971年にはサンデー毎日が醜い日本人を痛烈に諷刺した「魍魎歌」を(10月17日号)、1972年には再び週刊朝日が、カトリック系月刊誌「創造」5月号に発表後直ちに発禁となった「蜚語」を紹介した(4月21日号)が、この間徐々に健康を蝕まれていた作者は、投獄、釈放、入院、退院、逮捕のくり返しの中でなお筆を折る事なく、不屈の抵抗精神から当局の非を糾弾しつづけてやまなかった。

1973年暮には前年10月に始まった維新体制の残虐性を告発するべく諷刺詩「五行」¹⁴を脱稿した。さきの「五賊」の元締めである「お上が、丁度自分が避雷針のつもりでもあるのか十五斤もある金冠をピカピカさせて、かぶって我が世の春とばかり笑いまくって」いたところ、稲妻が「お上のおつむにまともにグーン、その場で即死してしまう」という筋書きである。天地五行説をふまえた形をとるこの詩では、たわむれに「金剋木、万古真理不可逆」を真理としてかかげるが、金が木に勝つというのは朴が多く、金(殺害犯人の金載圭元中央情報部長、実質的共犯者とされる金桂元元大統領秘書室長、且て斥けられ今あとをおそう者として再登場を噂される金鐘泌元首相、さらには反朴のリーダー金泳三新民党総裁、及び金大中

13 キム・ジハ著 渋谷仙太郎訳『長い暗闇の彼方に』“五賊”，中央公論社，1971年。なお，“五賊”は姜舜訳「キム・ジハ詩集」(青木新書)にも収録されているが、訳文は上記藤島訳が一番こなれているようである。

14 井出愚樹訳『金芝河作品集』青木書店，1976年。

元大統領候補、反朴のカトリック神父金寿煥枢機卿、そして何よりも金芝河自身) について倒されるといふその後の運命を予示して甚だ不気味なものがある。

こののちも金芝河の筆はますます冴えて、あらゆる弾圧にも屈することなく、抵抗の精神をうたいつづける。さきに摘発した五賊の背後にあって民衆を苦める真の五鬼、封建制を示す小農鬼、民衆の苦しみに目をそむける独裁制を象徴する水害鬼、外国勢力をあらわす外穀鬼などの鬼を弾劾告発する農民啓蒙劇「真五鬼」¹⁵を各地で上演¹⁶してかなりの反響を呼び、また「源氏物語」をもじった「羹氏物語」¹⁷では日韓癒着を真正面から取り上げて痛烈に諷刺したのであった。

さて、これ程の激しい体制告発の政治諷刺が、今大幅な機構の縮少を伝えられている、悪名高いかつての KCIA の数十万をこすといわれるスタッフ、協力者の監視の眼をくぐって、どうして書き続ける事が出来たか、まさに奇蹟と云う外はない。考えられることは、外国人宣教師の手によってひそかに国外へ持ち出されたいくつかの作品が海外で大反響を呼び、アジア・アフリカ作家会議によるロータス特別賞授賞となり、サルトル、ノーマン・メイラー、チョムスキー、ジェローム・コーエン、シケイロス未亡人等々著名人の支持声明があいつぎ¹⁸、世界各地に救援組織が生まれ、それが一つの国際的与論となって、死刑から無期へ、或は一時的執行停止などの措置を生んだことであろう。又、国外に持ち出された未発表原稿が、日本、アメリカ、オーストラリアなどでそれぞれ翻訳¹⁹、上演されたり、これ

15 中央公論1974年9月号に収録以来、日本では「チノギ」に対して「鎮悪鬼」の漢字を宛てているが作者の意図は“真の五賊”の意味の“真五鬼”だという。(前掲書 p. 306)

16 もちろん underground theatre での公演である。

17 塚本照訳、『世界』、1974年10月号。

18 袖井林二郎「結託を破る連帯を」1975年6月7日毎日新聞夕刊。

19 たとえば在日韓国青年同盟は1975年3月以来日本各地で十数回にわたり原語で巡回公演を行なった。

までの全作品が原文のまま金芝河全集として日本で出版される²⁰、などと云った、きわめて特異な発表形式をもち得た事が幸いしたといえる。

金芝河の諷刺詩、諷刺劇以外にも朴体制を糾弾する政治諷刺はあとを絶たなかった。ひそかに回し読みされたり、ソ連のアングラ出版物、サミズダートのように騰写版原紙が細い筒で転送されて印刷配布されたり、集会や街頭でくばられたりして続けられた。はじめ金芝河の作品とされた²¹「民衆の声」などは、1974年4月3日、ソウル市内で騰写版刷りのハングルタイプのびらで配られたものを日韓連帯連絡会議が入手して東京で発表したものであるが、のち真の作者はソウル大法学部除籍の張琪杓である事が裁判所の起訴状から明らかとなった。また、1977年6月号の雑誌「世界」に紹介された体制批判の長篇詩「奴隸手帳」の作者は梁性佑²²であり、諷刺詩「十章の歴史研究」や「十字架研究」の筆者は金明植修道僧であった。国民をにわとり、為政者を飼育師、治安機関員を犬、「北」を山猫に見立てて、韓国の閉塞状況を痛烈に諷刺した動物寓話「狂った鳥」²³は大学講師朴養浩の執筆によるものであり、1978年5月28日付サンデー毎日に紹介された長篇詩「労働者の炎」の如きは今なお筆者不明のままである。このように実名、匿名をとわず、逮捕投獄をおそれずに体制の悪をあえて告発する政治諷刺の量は日本に知られたもの以外にも相当な数にのぼったものとおもわれる。

とは云うもののこれらのいわば非合法文書がひろく国民大衆の眼にふれるのはかなり限られて来るわけであり、そこで一般のマスコミで検閲と記

20 金聲活編集『金芝河全集』漢陽社、452ページ。

21 「金芝河氏?の怒りの詩公表」1974年6月22日朝日新聞。「金芝河の死を賭した詩、極秘入手、未発表独占公開」1974年8月2日『週刊ポスト』。

22 他に1979年秋号の「創作と批評」(ソウル)に発表したものの邦訳が11月号『世界』に紹介されている。

23 「第二の金芝河か韓国当局に連行された作者。問題の諷刺小説『狂った鳥』全訳」1977年11月18日週刊朝日。

事差止めの眼をくぐり乍ら活躍するのは政治漫画と云うことになる。²⁴ 朴政権に対して頑強に抵抗をつづけて、1974年12月には契約解除された15段分の広告欄を白紙のままて発行した反骨の新聞「東亜日報」にはシンボルとも云うべき四コマ漫画があり、²⁵ 1955年から連載を続けて来た。金星煥²⁶の筆になる「高岩ヨンガム」(コバウおじさん)は或意味では国民的英雄であり、きびしい検閲下にあつて時に四コマとも白紙のままて、時にマスクをかけて物云わぬ姿で、漂々として時局を諷し、政治を批判し、「絵の論説」として節を曲げる事なく己の信念を主張して来た。検閲官の掲載許可すれの軽わざでどこまで物が云えるかが勝負であり、ともかく続いている事自体が値打ちという貴重な存在と云えよう。

ところで言論の自由を民主主義の綱領としてかかげる自由主義諸国家においては、反対に諷刺は充分に発言の場を得る筈なのであるが、権力との対決状況がなく、また検閲官との hide and seek がゲームとして成立しないために傑作が生まれにくい。民放テレビ・ラジオにおけるスポンサーからの陰の圧力、国営放送における当局に対する自主規制も諷刺の阻害条件となって来る。占領下のNHKラジオ放送の「日曜娯楽版」のように、表面化しない米軍の検閲制度の裏をかき乍ら例外的に成功を収めた例があるのみである。²⁷ 昭和22年10月から27年6月までつづいたこの番組は、多くは世相・風俗を皮肉る社会諷刺であったが、時に政府や米軍に対する鋭い諷刺を放つて大方の喝采を博したのであるが、次第に毒素を失なつて27年

24 フランコ政権末期のスペインのように、体制批判を「語り付きのソロを取入れたフラメンコ」舞踊で示すという satirical dance と云うものもある。

25 1974年12月26日付夕刊。

26 日本語訳もある。山本文尊・朴在一訳 サトウ・サンペイ監修『コバウおじさん』柘植書房、1975年8月(東亜日報1974年3月から1975年5月掲載のもの)。

27 飯沢匡『武器としての笑い』岩波新書、1977年、p. 36。

丸山鉄雄「日曜娯楽版の興亡」(『文芸春秋デラックス、Joke & Parody』1978年5月号) p. 102。

からはその名も「ユーモア劇場」と変り、29年3月、造船疑獄にあたって、「冗談音楽」の中で政府の指揮権発動によるもみ消しを諷刺したのを最後に遂に電波から姿を消したのである。

その後の日本の政局の展開は殆ど無数と云ってよい絶好の諷刺の種を提供し乍ら、高度な政治諷刺に恵まれないで来ている。52年2月、劇団青年劇場は飯沢匡作並びに演出の「多すぎた札束」を上演して金権政治批判を行ない、同年4月 芸能座は 永六輔作「純情 二重奏——大笑い 計量法伝・伝」によって計量法を諷刺し、歌舞伎座は木村錦花作東海道中膝栗毛の中で^{ロッキード}六木戸紅漢、^{コーチャン}小千谷勘助、^{クラッター}倉田伝助を登場せしめた。また有吉佐和子も52年2月号の中央公論で醜い日本人を諷刺する喜劇「日本人万歳」を発表したが、残念乍らいづれも成功したとは云いがたいようである。諷刺詩、諷刺劇、諷刺画をとわず現在の日本は山藤章二の「ブラック・アングル」²⁸を唯一の例外としてこの面ではまことに不毛の時代であると云う外はない。

第三代大統領 Thomas Jefferson が journalism を立法・司法・行政とならぶ第四の柱だとした「言論の自由」の本場、アメリカではどうであろうか。1936年にすでに automation と極度の分業化を諷刺して、四十年を経た今日なお繰返し上映される不朽の名作「モダン・タイムス」を作り、第二次大戦への警告をこめてヒトラーを徹底的に諷刺した「独裁者」を作ったチャーリー・チャプリンも、戦争による大量殺人を批判した「殺人狂時代」によって遂にアメリカを去らねばならなかった。また、ケネディ暗殺の謎とジョンソン大統領の権勢欲を痛烈に諷刺したパロディ劇「マクパード」²⁹は遂にアングラ劇場を出て、ブロードウェイに進出することが出来

28 山藤章二、『山藤章二のブラック・アングル』朝日新聞社、1978年。他にマッド・アマノのパロディにおける活躍があるが、政治面での題材は多くない。cf. マッド・アマノ『パロディって何なのさ』ブロンズ社、1978年。

29 拙論「政治諷刺とアナキズム、『マクパード』の場合」『人文学』(同志社大学)105号、1968年。参照

なかった。結局アメリカでも政治諷刺のにない手はパロディがらみの政治漫画ということになってしまうのである。ダートマス大学でマス・コミュニケーション論を専攻したチャールズ・ファーバーという男が「アメリカの政治漫画」というタイトルで博士論文を目下サン・ディエゴ大学に提出³⁰中である。それによればかのベンジャミン・フランクリンこそがアメリカ最初の政治漫画家であり、自分が発行する「ペンシルベニア・ガゼット」に寸断された蛇を大きく描き「団結か死か」とキャプションをふって植民地間の結束を訴えたのがアメリカでの政治漫画第一号だというのである。以来二百年それはジャーナリズムによる政府攻撃の最有力の武器として、汚職をあばき、不正を追求し、多くの政府高官を失脚せしめて来た。そして1960年代、ベトナム戦争とこれにつづくウォーターゲイトによって絶好の活躍の舞台を得³¹、多くのアメリカ人に笑にくるんだ攻撃によって、一目で問題の所在を知らしめ、問題の提起を行なって来たのである。

こうしたアメリカ流の政治漫画のはげしさ、するどさはたしかに相当の効果を期待しうるのであるが、同時にその野蛮さ、非芸術性、行きすぎを指摘する声もまた多い。そこへゆくとフランスはさすがに芸術の国である。猛烈なスッパ抜き、毒舌、嘲笑で歴代の内閣が泣かされて来た諷刺雑誌「キャナル・アンシェネ」はわずか八ページ建ての週刊誌ながら全紙に激しい諷刺を満載して、それでいてまことに優雅に、アカデミックに、にっこり笑って大臣たちを失脚せしめて来たのである。1979年10月30日、フランスのブーラン労働大臣が投身自殺し、政府、議会、マスコミは衝撃をうけて騒然となったが、当局の調べで原因はこの月24日発売の同誌が「不動産の不法取得」をスッパ抜いたことだとわかり、フランス国内は

30 チャールズ・ファーバー「政治漫画の伝統」*Trends* 42, “特集アメリカの政治” 1978年10月号(アメリカ大使館)。

31 マッド・アマノ「大統領なんか怖くない、—アメリカの政治漫画はなぜ強烈なのか—」『朝日ジャーナル』1977年7月15日号。

再度騒然となった。「カナール・アンシェネ」編集局は「まことに悲しむべき出来事である」と弔意を表しながら、「しかしカナール・アンシェネは事実以外は書かない」と突張り、一步も引くかまを見せていない。³² 労相の自殺も同記の六十年に及ぶ歴史に又ひとつ厚みを加えた事にしかならないようであるが、同誌の本領はこうした scandal の muckraking よりも、むしろ都会風にひねりを利かせた、しゃれた言葉のあそびにある。ラテン語の素養、ギリシア神話の知識、フランス史の理解がなければ到底判読出来ないほど手が込んでいる上に、キャランブール³³ (語呂あわせ) やコントロールペトリ³⁴ (一部の文字又は音節を入れ換えてどちらも意味があるように仕掛ける文字遊び) を多用して、しかも寸鉄人を刺す鋭い諷刺を行なうというものである。フランス人の歴史好きはアナトール・フランスの「ペンギンの島」³⁵ のようにフランス史の過去から未来にまで及ぶ各時代をふまえた寓話や、ゴール時代のフランスを舞台にした、ゴシニー、ユデルゾ合作の大評判の一大長編漫画「アステリックスの冒険」³⁷ などにも現れているが、自国の歴史の故事来歴に通曉していないと解説出来ないこと、相当の学識を必要とすること、政治のメカニズムに精通していること、言葉を用いるあそびが横溢していること、そしてその上で強烈な反体制感覚をもつこと、これが本来の洗練された都会的政治諷刺の絶対必要条件と云えよう。

その意味では本年八月一日、十三年ぶりに名誉を回復した中国のかつて

32 1979年10月31日朝日新聞夕刊。

33 Fr. "calem bour" = "jeu de mots"

34 Fr. "contre-pétrie", e.g. la tête coupée→la coupe têtée

35 倉田保雄「鎖につながれた『アヒル』の反骨」『文芸春秋』1974年3月号。

36 A. フランス『ペンギンの島』(『世界の文学』第23巻)中央公論社。

37 René Goscinny & Robert Uderzo, *Une Aventure D'Astérix*, 双葉社, 1974年。

の反党集団「三家村グループ」の諷刺文「燕山夜話」と「三家村札記」はまさにその典型である。違いは「カナール・アンシェネ」誌は盗聴装置を仕掛けられる程度で事たりるが、三家村の場合は文字通り命をかけていたという事であろう。

発端は1965年9月、毛沢東主席が自ら上海に赴いて当時解放日報評論員であった姚文元に批判論文の執筆を命じた事から始まる。それは1961年1月「北京文芸」に掲載された当時北京市副市长呉晗製作にかかる京劇脚本「海瑞罷官」を批判するためであり、これに自ら手を加えて1965年11月上海文汇报紙上に「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」を発表せしめ、いわゆる「文芸整風」の口火を切ったのである。この動きは半年後「文化大革命」となって全国を十年にわたって巻き込む嵐となるのであるが、当時は単なる「政治文学論争」の一つと見なされていたのである。この戯曲は明代の清廉な官吏海瑞が時の皇帝穆宗に直言して入れられず、遂に免官となるという史実を題材としたものであるが、姚文元はこれが1958年スタートした三面紅旗（大躍進、総路線、人民公社）運動の翌年、いわゆる廬山会議に於て大胆にこれを批判して毛主席の怒りにふれて失脚した彭徳懐国防相の復活を計るものだとして弾劾したのである。この政治諷刺劇は期せずして片や、彭真、鄧小平、劉少奇という現実路線、片や張春橋、江青、毛沢東という極左路線の対決の場となったもので、いわばこのドラマから文化大革命、四人組追放という近代中国最大のドラマが始まったと云う事が出来るのである。

一方、北京市党委員会書記で人民日報前編集長の鄧拓は「海瑞罷官」に腐接して1961年3月から夕刊紙「北京晩報」に「燕山夜話」と題するエッセーのコラムを担当し、豊富な学識を傾けて、史実や故事を縦横に駆使し

38 毎日新聞は文化大革命の開始とともに原文を入手、1966年6月11日から抄訳を連載し、同年9月単行本として出版した。これはのちに菊池寛賞を受賞した。1979年11月、13年振りに再刊された。

て、道徳、教育、文学、美術、演劇、農業、科学技術を論じたが、1962年9月まで続いた153篇はのちまとめて北京出版社から上梓された³⁹。

鄧拓はまたさきの呉晗と北京市党委統一戦線部長の廖沫沙との三人組で呉南星という合同ペンネーム⁴⁰の下で北京市党委理論雑誌「前線」に「三家⁴¹村札記」という同傾向の随筆を連載し、1961年10月から1964年7月に及んだ。これらの随筆集はいづれも達意の名文であると云われているが、強烈な批判精神をたくみに史実故事に託して政局を諷刺するエッセーは大躍進政策に批判的であった知識人の心をとらえ、各地の新聞、党機関誌に類似のコラムが続々誕生し、路線批判の声⁴²はついに一大勢力となり、動かしがたい与論となりかけたために毛主席は強権を発動して文化大革命をおこす事になったのである。

そして「偉大的空話」や「兩則外国寓言」のように、真向から毛沢東の権威を諷刺したもの、「推事種々」や「多学少評」のように党の硬直化路線をからかったもの、「一個的鷄蛋的家当」のように幻想をふりまく党中央の政策を批判したもの、などはまさしく政治諷刺の本領を発揮したものであり、長く古典として今後のさまざまな局面に想起されることであろう。

1979年8月1日の新華社電は、北京市党委が党中央の批准を経て「三家村グループ」の名誉回復を行なった事を報じた。これは四人組の苛酷な迫害によって死に追いやられた鄧拓、呉晗の追悼を行ない廖沫沙の通常の活動を回復させるためのものであるが、同時に風是派（毛沢東の決定ならす

39 はじめ分冊で出たものにはそれぞれ馬南邨名儀の序文がつけられている。のち「合集」として一本化された。

40 呉晗、馬南邨（鄧拓）、繁星（廖沫沙）の合体名。

41 南宋第一の詩人陸游の失意の詩からとったといわれている。

42 拙論「中国の近代化 七、“カリスマの近代化”」『人文科学』（同大人文研）No. 9, 1978年。

べて支持するというグループ) に対する両点派 (毛沢東には良い面と悪い面があるというグループ) の絶好の武器として役立たせようとする意向が働いているものとおもわれる。すでに一個の古典として次の時代に活用されているというべきであろう。

おもうに、政治諷刺とは所詮非力を前提とする自己主張の芸術的表現である。それはアジビラでもなければ純粹の芸術作品でもない。従ってそこに革命勢力の如き強力な政治効果を期待することは木によって魚を求むるたぐいであろうし、高度な芸術性をそこに望む事も所詮は無理な話である。それは又真に偉大なもの、究極の原理、人にとってシリアスなものを諷する事も出来ない。もともと愛や恋、死や復興そのものは一般の諷刺の対象には入っていないのである。それは偉大なる権威の崩壊過程にこそ目ざましい働きを見せるものなのである。鄧拓も金芝河も世人の眼には今なお絶対の権威と見える人物の尊厳がすでにゆらぎ始めている事を知っていた。ハイエナの如く諷刺家は生身の人の死臭を嗅ぎわけて、「奴の時代は終わった」と叫ぶのである。

彼等はまた根本の原理にふれる事をしない。三家村グループは共産主義を否定しなかったし、金芝河は「私はコミュニストでない」と明言した。「カナル・アンシェネ」に至ってはフランス共和制についてついに一言もふれようとはしなかった。根本ではなく部分である。頭の冴えた、感の鋭い、だが窮極の原理には鈍感な諷刺家は体制がちらりと見せる隙にすばやく飛付いて、「ここからこわれ始めるぞ」とわめくのである。

そして彼等は都会人であった。洒落、地口、あてこすり、語呂合せ、パロディ、それが直ちに理解出来ない人は彼の聴衆ではなかった。諷刺家たちの鋭い知性と強い批判精神はこうした条件がみたされる時、今後も思わぬ局面に突如として現われる事であろう。(完)